

a 学校教育目標	郷土に誇りをもち、夢や目標に向かって主体的に取り組む子どもの育成	b 経営理念 ミッション・ビジョン	【ミッション】(自校の使命) 子どもたちの未来を保障し、地域とともにある学校 【ビジョン】(自校の将来像)郷土に誇りをもち、夢や目標に向かって主体的・協働的に課題解決に取り組む子どもを育てる教育活動を創造する。
----------	----------------------------------	----------------------	--

評価計画					自己評価					改善方策	学校関係者評価			
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策等	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	l 評価			mコメント
					h 達成値	h 達成値					適正	不明	不適正	
確かな学力の育成	自ら考え、自ら学びに向う児童の育成	基礎・基本の定着	学力向上に向けた取組の充実(授業改善・授業力向上・学力向上強化週間、桜山タイム)	①国語科(漢字・学期末の平均)・算数科(学期末)のテスト80点以上の児童80%以上 ②NRT各教科の標準偏差が昨年度以上(各学年)	①国・算のテスト80点以上の児童80%以上(1・2年生は90点以上の児童90%) ②全学年昨年度の標準偏差以上		①1・2年国:84.4%算:75.1% 3～6年国:83.1%算:81% ②30%	B	1・2年生の目標を90点以上90%以上に設定した結果、低学年の達成値が国語も算数も90%を超えることができず、特に算数の達成値が低い結果となった。3年～6年では、学年でばらつきがあるものの平均すると80%を達成することができた。 NRTテストでは、昨年度の標準偏差を超えた項目は、3・5・6年生の算数の3項目のみで、国語よりも算数がよい結果となった。	・つまづきがあった単元・領域を分析し、桜山タイムで継続した対策を行う。 ・単元・領域を焦点化して授業改善を行い、1時間の授業での理解度を上げる。 ・スマイルタイム等で、個に応じた指導の時間を確保していく。 ・担任外の教員と連携し組織的な取組を行う。	○			・3～6年生の算数科・国語科の達成度が80%越えは素晴らしい。桜山タイムの成果の表れだと感じた。
		学習意欲の向上(学びに向かう力の育成)	プロジェクト型学習の考えを基にした単元開発(カリキュラムマネジメント、課題発見・解決学習) 家庭学習強化週間の実施	ニ中校区アンケートにおける肯定的回答 ①「将来の夢や目標をもっている」 ②「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」 ③「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」「学校がある地域のよいところを知っている」	①80% ②80% ③80%		①88.7% ②89.6% ③85.4%	A	全項目で目標値を超えることができた。学期はじめの目標設定や、授業の中での自己決定、最後までやり切らせる授業設計が効果的だった。地域への意識に対しては3項目の中で一番低かったが、どの学年も1学期は地域とのかわかりが薄い学習単元だったことが影響していると考えられる。	・目標の設定、活動方法や内容を自己決定を継続する。 ・ゆとりのある授業設計をし、最後までやり切らせ、相互評価や外部評価を通して達成感を持たせられるようにする。 ・地域の人やものと具体的に関わる学習単元を設定し、郷土愛を育んでいけるようにする。	○			・自分の意見を伝えたり、友達と意見交換したりするなど課題解決に向け、進んで学びに向かう姿が見られた。
豊かな心の育成	生活指導項目の指導の徹底と体験活動の充実による豊かな心の育成	生活指導5項目の指導の徹底	あいさつ、時間厳守、ピカピカ無言掃除、右側歩行、靴揃えのうち、重点「あいさつ」の徹底	児童アンケートで、三原小あいさつレベル3(元氣よく・相手を見て・あいさつを返す)ができていると実感する児童の割合	90%	70.5%	78.3%	C	児童アンケートの結果より、あいさつレベル3以上でできていると実感している児童は目標値に届いていない。教職員の見取りとしても、気持ちのよいあいさつができていている児童は昨年度より増えているように感じるが、あいさつを返すことができていない、声が小さくあいさつを届けられていない児童もいる。 また、その他のきまりについては、意識できている児童が概ね90%に近いことから、「～しなければならぬ!」については意識しやすく、「～したほうがよい!」のきまりは意識しにくいのではと推察される。	・委員会等の呼びかけで「あいさつウィーク」を行い、あいさつをする機会を意図的に増やしていく。 ・返事とあいさつを求める指導を行っていく。 ・「～するとみんなが気持ちよく過ごせる。」といったきまりや取組の意義を教職員で共有し、日々の指導の中で意識的に価値づけていく。	○			・挨拶の徹底に取り組む、成果を上げていることが素晴らしい。
		自己肯定感の向上	友達との関わりの強化 認め合う集団づくり	QUアンケート、学校生活意欲総合点の分布において、28点以上の児童の割合	80%	80.7%	100.9%	A	QUアンケートの集計結果より、全校児童を分母とした場合の割合は80.7%であり、目標を達成している。しかし学年別に見ると、1年生85.1%、2年生73.6%、3年生76.8%、4年生87.3%、5年生75.6%、6年生86.1%となっており、3学年達成できていない。学習面でも生活面でも意図的に児童相互の関わりを意識させてきたが、児童の実感として、友達から認められていると感じていない児童が2割程度いることから、さらに取り組んでいく必要がある。	・学級での認め合いにつながるよう、まずは教師からの肯定的な評価を増やし、その伝え方を教職員で意識統一していく。 ・児童が「自分で考えた」と思えるようにするために、自己決定の場を意図的に設定していく。その際、適度に選択肢を教師から提示していく。 ・係活動、当番活動、委員会活動での活躍の場を設定し、児童相互の賞賛の場にしていく。また、振り返りの時間を確保し、児童自身が認められたと自覚できるようにしていく。	○			・登校中や校内で出会う児童はよく挨拶をしている。コミュニケーションづくりの一番大切な内容であることを保護者へも伝えて協力してもらうとよい。
健やかな体	健康教育と教育活動の工夫による運動能力・体力の育成	運動習慣の定着	① 体育の運動量の確保 ② わんぱくタイム	① 児童・教職員の運動アンケートによる評価(学期に1回) ② わんぱくタイム(運動遊び)への参加率	①80% ②90%	①92.3% ②88%	①115.3% ②97.7%	B	①の児童・教職員のアンケートの結果から、体育の時間で体を動かすことが実感できた児童が多かったことが分かる。しかし、運動に苦手意識がある児童が全体で1割いることが明らかになった。 ②のわんぱくタイムのアンケートの結果から、わんぱくタイムに参加する児童が増えた。体育委員会が中心となり児童に呼びかけたり、教職員が声掛けをしたりしたことがプラスの働きかけになったと考えられる。しかし、外に出ることや体を動かすことに対して苦手意識をもつ児童に対して具体的な手立てができていなかった。	①に関して、今後も児童の運動量の確保のために体をしっかり動かしたと実感できる授業づくりをしていく。運動時間30分を目指し、説明は最小限にし、相談や水分補給の時間は確保する授業づくりをしていく。 ②に関して、運動への苦手意識をなくすために、勝ち負けのない、体ほぐしの運動を授業や朝の会や帰りの会に取り入れていきたい。児童が手軽に継続して体を動かす機会を作っていく。	○			・引き続き、わんぱくタイムなど身体を動かす楽しさを経験できるようにしてほしいが、小学校の段階で運動量の確保に苦心されていることに驚きがある。
		食習慣の定着	① 栄養教諭と担任とのT.T.授業全学年 ② 日々の給食指導	食に関する児童アンケートによる評価	① 100% ② 80%	①50% ②90.3%	①50% ②112.8%	B	①は、現在、半分の学級で食育授業を行うことができた。 ②は、特に低学年で給食で初めて食べるものがあり、食わず嫌いで食べることが難しい児童もいた。食べたことがない食材に対して抵抗感がある児童に対して、食べることの楽しさを実感できる手立てができていなかった。しかし、食べることが大切だと肯定的に回答する児童が9割いるため、給食放送や食育劇等で引き続き伝えていく。	①は、引き続き、担任と連携しながら行っていく、児童の実態に合わせて指導を行っていく。 ②栄養教諭が給食時間に各学級を回りながら、食べることの楽しさを味わうように声をかけたり、一口チャレンジ(少しでも味わってみる)の呼びかけを行ったりしていく。	○			・食育については、食育劇など先生方が工夫して指導されているのに感心した。
信頼される学校	保護者・地域から信頼される学校づくり	地域を繋ぐ教育活動の工夫	①地域の行事への参加等(ゲストティーチャーの奨励、幼・保・小・中の連携) ②学年便りの作成 ③HPの更新	①各学年、年に1回以上 ②③月に1回以上	100%	100.0%	100.0%	A	①各学年とも、1学期に、生活科や総合的な学習の時間を中心に、1回以上、地域との連携を取り、探究活動等を行うことができた。 ②学年便りは、月1回以上の発行をし、保護者に学校での様子を伝えることができた。 ③HP作成は、月1回以上の更新を行っている。	①今後も、児童の思いや願いと学習活動を繋げながら、積極的に地域との連携を取り、効果的に活動を行っていく。 ②継続して、学年での様子が具体的に保護者に伝わるように内容を充実させていく。 ③ICT部が主となって進められるように計画を立て直していく。	○			・地域の行事に参加したり、地域を知ったりすることで郷土愛が育っていると感じた。引き続き地域とのつながりを大切にしてほしい。 ・子供たちのためにより良い教育をと思う程、時間外勤務が増えているのだろう。職員間で共通意識をもって取り組まれていることが伝わった。
		働き方改革(次世代の働き方への体制づくり)	計画的な時間外勤務の短縮 業務改善の推進	時間外勤務月45h以下を6か月以上実施	100%	45.2%	45.2%	D	時間外勤務月45H以下を6か月以上達成できた職員は45.2%であった。準衛生委員会で話し合った結果をもとに、留守番電話セット、施設巡回開始、施設5分前の声掛けを行うことで一人一人の意識化を図った。また、職員の困り感・負担感を把握し、丸つけのシステム構築、2学期から短縮時程の日数を1日増やし、業務に専念できる時間確保に努め、少しずつ成果が表れている。	学年主任会の機能化を図り、早目のスケジュール提示を行い、業務の効率化を図る。 各学年、各部で困っている業務をあげ、業務の再調整システムの研修を図る。 研修内容の精選等を行い事務時間の確保を行うとともに継続して業務量の平準化、行事のあり方について継続して検討を行い、働き方改革につなげる。	○			・行政と共に取り組む課題も多いと思う。 ・先生方のチームワークの良さや笑顔が今の三原小を支えていると思う。

【j: 自己評価 評価】
A: 100≦(目標達成) B: 80≦(ほぼ達成)<100 C: 60≦(もう少し)<80 D: (できていない)<60

【l: 学校関係者評価 評価】
イ: 自己評価は適正である。 ハ: わからない。
ロ: 自己評価は適正でない。